

特集1
馬荷の七立栗
ななたてくり



黒潮町西端に位置する蛸瀬川の流域地域「馬荷地区」には、弘法大師にまつわる言い伝えが残っています。

「弘法大師が修行の途中、馬荷の山中まで迷い込んでしまった。夜も更け、お腹も空き、困り果てて一軒の民家に助けを求めます。そこには炭焼きの信心深い夫妻が住んでおり、貧しいながらも心をこめて精一杯のおもてなしをします。翌朝、目を覚ました弘法大師は、その手厚いお接待に心打たれ、別れ際に「私が去った後、きつとあなた方に幸せが訪れるでしょう」と言い残します。その後、裏山に年に7回も実をつける栗の木がたくさん生えた。」

その後も、馬荷地区には、子宝栗とも呼ばれる甘くておいしい七立栗の実が絶えることはなかったといえます。

この地域は、周囲一帯を山々が囲っていて、昔はその谷々まで小さな田んぼがつくられており、部落総出で山焼きが毎年行われていたことから、七立栗が自然に生え育っていったそうです。

秋の終わりには、大きな桶いっぱい七立栗が獲れたそうです。地域の人々は、ゆで栗や栗ご飯にして食べたり、収穫した栗を市場へ出荷して生計の一部にしました。

自然の七立栗の危機

時代とともに、都市部への出稼ぎや人口の減少が続き、地域では山焼きが行われなくなりしました。

現在山にある自然の七立栗は、野生化し、一見して七立栗、シバグリの種別は難しいほど巨木となっています。

草木のおい茂った山には、わざわざ七立栗を獲りに入る者も少なくなってきました。七立栗にまつわる言い伝えや山焼きの文化を知る人が徐々に減り、栗そのものの存在さ

えも失われていく状況になりつつありました。

七立栗を守る

このような状態が続く中、貴重な七立栗を守るために栽培して残していこうと、地元 堀川寛さんを中心に、平成6年、地域の有志7人が集結し『七立栗保存会』が結成されました。

結成前から七立栗の再生に取り組んでいた堀川さんが育てた苗木をみんなで分け合い、勉強会や視察を行いながら各自の家で育ててきました。

その後、会員を1名増やし、平成11年には、4アールほどの共同園を整地し、種から苗木を育てあげ、接ぎ木の販売が始まるまでになりました。



七立栗の圃場（馬荷地区中馬荷）

守り続けるために



平成3年から、七立栗再生に向けて取り組んでいる、堀川寛さん

長い時を掛けて試行錯誤を重ね、平成20年からは観賞用の枝栗として商品化し、市場への出荷が行われていますが、現在、会員の中で本格的に七立栗の栽培・出荷を行っているのは、堀川さんただ一人になってしまいました。

「今までいっしょにやってきた仲間も、高齢化や病気がどで畑に出て来ることが難しくなりました。若い人にやっても、それにはもう少し販売価格が良くなるように、出荷の方法も改善させなあ、自分がやって、ちゃんとしたもん作って、販路も。人が「やってみたい」と思えるようにせんといけんと思ってます」と、堀川さんは力を込めて話します。枝栗として出荷するまでに

「七立栗」はひとつの枝に年7回実がなることから、この名がつけられました。



は、夏場の草刈りはもちろん定期的な枝うちや消毒などの手間を必要とし、出荷にも注意しなければいけないそうです。「前は個人で出荷しようとして、予冷库や保冷車もないまま、出荷してもすぐに枯れてしまい、一度は中止になった。農協や町に協力をしても、農協や町に協力をしてもらいながら、去年からJA南部支所を通じて、切り花と同じように市場に出せるまでになった」とのことです。現在の課題は、枝の水あげを更に改良すること。農業普及センター指導員さんにも教えていただきながら研究中です。また、枝栗としてだけでなく、新たな形での商品化や、昔ながらの山焼きそのものを蘇らせ、昔ながらの風景を取り戻そうという動きも、地域の中で生まれています。(かきせ川地域づくり協議会へ代表 表川村 渡 43-2622)